

日本学術振興会研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）
中間評価（平成30（2018）年度採択課題）書面評価結果

日本側拠点機関名 東京工業大学（特命教授・細野 秀雄）
研究交流課題名 欠陥誘起機能を利用した持続可能エネルギー材料：材料設計の新概念から素子応用まで

評価結果（総合的評価）	
○	A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
	B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
	C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
	D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。
所見	
本課題は、欠陥誘起機能を利用した持続可能エネルギー材料の創出を可能とする世界最先端の研究交流拠点を形成することを全体目標として実施されている。 令和元年度までの活動成果は本事業が趣旨とする国際的研究交流拠点形成に向けて効率的かつ着実なものであり、相手国機関とは、活発な交流の実績を挙げており、若手の交流、育成など順調に進行している。特に研究交流（セミナー／ワークショップ／シンポジウムおよびサマースクール）は、十分な数が行われており、次世代の中核を担う若手研究者や学生の相手国との研究ネットワーク構築が進んでいる。 一方、共同研究6課題のうち、3課題については国際共著論文が発表または、まもなく発表という段階まで来ており、国際研究拠点となり得るような学術的価値の高い成果が上がりつつあるが、これまでの成果を明確な実績として残していくことが課題である。 令和2年度はコロナ禍のために交流は停止しているが、オンラインでの情報交換は可能であろう。国際的な交流が本事業の中心活動であることから、長期にわたって人的な直接の交流が困難になる可能性に対して、研究交流、共同研究の継続方法を考えられるとよい。	